

保育領域にチーム体制を取り入れた支援について

学籍番号 199223

氏名 間井谷容代

主指導教員 梅川康治

1. 保育現場での支援について

1.1 幼保連携型認定こども園の保育教諭の役割

幼保連携型認定こども園は、0歳児から就学するまでの乳幼児が対象であり、人生の土台作りの場である。また、「幼保連携型認定こども園の教育及び保育は、義務教育の基礎を培うことはもとより、義務教育以降の教育の基礎、つまり生涯にわたる教育の基礎を培う重要なものであることを忘れてはならない。」と記されている。

保育教諭とは、幼稚園と保育所の両面を併せ持った幼保連携型認定こども園の先生のことであり保育の専門家である。保育教諭は子どもにとって心地よい環境を提供しながら保育をすることができるように取組んでいる。

1.2 保育教諭の子どもへの支援

子どもの気になる行動は突然に起こることが多い。保育教諭はその度に、丁寧な関わりに努めている。しかし、子どもにとって、それが嫌と思う関わりとなることがあり、反抗的な態度で示してくることがある。その行動は多い。そのため、保育教諭が子どもへの関わりについて困惑する状況が続いている。

保育教諭は子どもへの関わりとして支援方法を工夫するように努めるが、解決に繋がらないことも多いようである。実習園である幼保連携型認定こども園で保育教諭の関わりとしての支援方法の実情を把握するため、実践を通して確認していく。

2. 現状と課題

実習園の子どもたちの家庭状況は様々であり、単身家族や共働き家庭が大半を占めている。そのため、保育教諭は保護者とゆっくりと相談できる時間を取ることができないことが多い。対応策として、連絡帳等を通して保護者の不安を減らすように心がけながら、保護者との情報交換をしている。しかし、気になる行動を取り続ける子どもについては、その子どもの保護者との相談は敏速にしたいようだが、難しいのが現状のようである。これらの現状について、保育教諭にアンケート調査を行い、子どもや保護者への思いや悩みなどを調べることにした。結果、「子どもへの対応が難しいこと」「保護者が受け入れてくれない」等の回答が多く、保育教諭・保育補助が悩みを一人で抱えこんでいることも明らかとなった。

3. チームで取り組む体制の構築

調査結果をもとに、保育教諭と共に相談しながら実践を繰り返した。子どもの気になる行動はどのような場面で起こるのか。その状況となるまでの背景は何か。保育教諭は事後の支援方法をどうしたのか。これらを確認するために行動記録をつけ、検討をしていくことにした。チームを組んで繰り返し行うことで子どもへの、より効果的な支援が少しずつ明らかとなった。チームで検討する時間として、週2回から3回、乳児クラスではお昼寝のタイミングで行い、幼児クラスでは保育が終わる午後4時以降で行うように取り組みを進めた。管理職には週1回、子どもの実態を伝え、情報共有ができるように務めた。また、保育教諭全体で対応を共有する機会や場を設定しながら進めるようにした。

結果、子どもの行動に落ち着きが見られるようになり、保育教諭の子どもを捉える視点が変わり始めた。これは、保育教諭が一人で抱えていた問題の解決の糸口を早期に見つけることができたのではないかと考える。個々の事例においては、いい結果もあり悪い結果もある。いずれであっても、頻繁に話合う機会を持つという取り組みを進めていくことで、保育教諭に情報共有のできる場が多く持たれるようになった。

最終的に、保育教諭が一人で抱えることが減り、支援策の共有をすることで、子どもだけでなく保護者への支援もスムーズに行われるようになっていくことができた。保育教諭が情報共有をしながら進めた支援策で支援をしたことにより、子どもや保護者との「信頼」が築かれるという効果も出てきているようだ。

4. まとめと考察

保育教諭のニーズとなっていた「子ども支援」「保護者支援」については、アンケート調査の結果より、支援の難しさが強調されていた。「子どもの突発的な行動への支援」、「子どもの気になる行動に対して保護者に相談を持ちかけるが、受け入れてもらえない」等、行き詰まる状況にあった。保育教諭の抱える問題は予想外に大きいものであった。

そこで、応用行動分析を活用し、子どもの行動に目を向け、支援策を検討した。また保育教諭がチームや全体で共有をする機会を設定することにした。結果として、保育教諭の子どもへの支援や視点が同じようになり、子どもの行動も落ち着くようになっていくことができた。チーム体制で取り組むことにより、子どもや保護者への支援が改善しただけでなく、保育教諭自身のキャリアにも繋がるものとなるであろうと捉える。このチームで取り組む体制は、徐々に構築したものである。今後の課題として、保育教諭やチームが変わってもこの構築した体制が定着していくのか。チームで取り組む体制を維持するためには何が必要なのか。今後の実践で明らかにしていきたい。